
純愛～忘れてはいけないもの～

鴉丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

純愛〜忘れてはいけないもの〜

【Nコード】

N2172B

【作者名】

鴉丸

【あらすじ】

このドロドロした世の中でも忘れてはいけないもの。中学を卒業して、高校入学を待つばかりの翔一。無事入学し、いろいろな人と出会い。そして…

春がゆつくりと近付く季節のある日に男の子と女の子二人は歩いていた。

「まったく…寒いのになんで俺があ野郎の家に行かなきゃ行けないんだ？間違ってるだろ。」

普通の人から見ればまずかつこいいと言われる様な男の子はそうぼやいた。

「またあ…そうやっていつも文句言う。翔ちゃんの悪い癖だよ？」

そのぼやきに対して女の子はしっかりと言い放った。

「翔ちゃんって言うなよ…恥ずかしいから。」「良いじゃんか。昔からこうだしさ」

この翔ちゃんこと、黒鳥翔一は一緒に歩いている木村愛と幼馴染みであり家はちょうど向かえにある。翔一は一応愛にとかしなさいとは言われているのだがいつも寝癖のままである。愛の髪型はセミロングでしっかりとしたストレートでやはり誰が見てもかわいい。と言う。

「でもよ…こんなクソ寒いのになんでわざわざ出向かなきゃ行けないんだ？愛だつて寒い苦手だろ？」

「寒いのが苦手なのは翔ちゃんでしょう？あつ。ほら。バス来たから急がなきゃだよ！」そう言って愛はテンテンと駆け出した。

「あつ。ちよつと待てよ！」

そう言って翔一も駆け出した。

シューという音がなり、バスの扉が閉じ発車した。

「はあ…危なかったね翔ちゃん」

「確かに…もう少し時間にゆとりを持って来なきゃだな」

「翔ちゃんが寒いから暖まるって遅かったからでしょ!？」

「すみません…」

「分かればよろしい」

「そう言えば優の家に行くんだっいたらどこで降りるんだ？」

「ん…あと二回留まったらその次だね」

「そんな近いならやっぱり自転車で行けば…」

「だから翔ちゃんが寒いからバスが良いって行っただんでしょ!！」

と愛が言った瞬間に周りの目が急に集まり愛は顔を赤くしてうつ向いた。

「ほら。お前の声デカイから…イデデデデッ！」

翔一が愛に追い討ちをかけようとした時後ろから翔一のお尻を女の子がつねり、さらに翔一の目を隠してこう言った。

「愛ちゃんのピンチを助けた美少女はだ〜れだ？」

「……………美少女？俺の知り合いにそんな人居たっけなあ？」

と、翔一がとぼけると、

「へ…翔一君はそんなにおしりをつねられるのが好きなんだ？」

「……………愛、悪かったよ」

「うん。良いよ」

「そうじゃなくてアタシは？」

「美咲には関係無いだろ？……………痛い痛い！つて愛!！」

先程から美咲が目隠しをしているので、今度おしりをつねる事が出来るのは愛だけである。

ちなみに最初にお尻をつねった女の子…飯田美咲はこの市の市長の娘である。髪型はショートである。

プシューと音がり目的地に着いたバス。

「さっ。愛ちゃん。こんな男は置いてさっさっと言きましょう」

「う、うん」

そう言つて美咲は愛の腕を抱いてバスから降りていった。

「ちよつと待てつて!!」

そう言つてトボトボと降りようとしたとき運転手が翔一に声をかけた。

「女の子達の連れさんだよね？女の子達の分も払つてね」「はあ…」

そう言つて翔一は三人分のバス代を払い肩を落としてバスから降りた。

「それでさあゝその時アイツね」

美咲と愛がいる間を翔一は歩いている。それには理由が有るのだが…

「おい…美咲」

「何？話の鼻を折らないでくれる？」

「なんで俺の腕を組んでるんだ？」

「だって…寒いでしょ？」

「寒いけど…」

「それにアタシ達カップルじゃない」

「いつから…」

「だからね。愛ちゃん。アタシはその時言つてやったのよ。」

美咲には何を言つても無駄と翔一は確信したのであった。

そうこうしているうちに

「あの野郎」

の家に到着した一行。やはり美咲は翔一に腕を組んでいるが…

「おい。来たわよー！」

美咲がインターホンを押して言った。

機械から

「あいあい。待ってました」

と、声がして間もなく扉が開いた。「おー。来たか。待ってたぞ」

「待ってたじゃねえだろ！寒い。お茶出せ」

「あいあい。まあ上がって。女性お二人は？」

「アタシもお茶」

「私もお茶が良いわ」

「フー生き返った」

「翔はオヤジか？」

「それよりも優？なんだ？話って？大事な話って言うから来てやつたんだからな？妙な話だったら…」

「わくってるて！」

そもそも呼び出したこの優と言う人物。名前は楠木優大柄な体格で体格が表すように生活は大雑把で明るいし、女性に対しては優しい、誰にでも愛されるタイプである。

「で？まーくん？もったいつけないで早く言ってよ！アタシ帰るわよ？」

「まあまあ美咲ちゃん。そう言わないで。もうすぐ中学最後の春休みだろ？だからこの四人で旅行しよう。って言おうと思ってるね。」

「確かに時間は有り余ってるけど…」

「そうだよ愛ちゃん！せっかく時間が有るんだ。もっと有効活用しなきゃ！」

「だからって…旅行って言うてもどこに？お金の問題とかも…」

「そつだぞ優！無理だ」

「う…」計画は持ち出したがやはりそこで止まってしまつのが中学

生である。が…

「じゃあアタシの家に泊まるってのは？」

「へ？み、美咲！変な事言うな！」

翔一が言うのが早いか優の目がキラキラと輝きだした。

「アタシのウチ結構デカイしさあ」

「でもうるさくて迷惑なったりしないか？」

「離れの家ですれば大丈夫じゃない？」

「決定！！」

翔一の必死の反抗も虚しく散り、待つてましたとも言つかの様に優が手を挙げて言った。そこで愛が口を開いた。

「でも…美咲ちゃんの親許してくれるの？」

「そつ、そうだ！ダメなんじゃないか？」

愛の質問に翔一が便乗する。が…

「ダイジョーブダイジョーブ。親にならなくても言えるわ」

「じゃあいつにする？」

「「はあ…」」

翔一と愛が溜め息を漏らすなか優と美咲で話は進められた。

「ところで皆…あの娘も呼んで良い？」

着々と話が進む中愛が口を開いた。

「アノ娘って？」

「ほら。唯ちゃん。おとなしい人だからね。私達と同じ高校行くのよ？覚えてる？」

「良くわからないけどオレは何人増えても良いぞ」

優はノリノリで言うが…

「唯…誰だそれ？本気で知らないぞ？」

「翔ちゃん。失礼だよ」

「人数増えても大丈夫よ！じゃあ唯ちゃんの連絡もよろしくネ！」

「うん!!」

唯一の味方だった愛でさえ敵になってしまったと、翔一は更にガツクリと肩を降ろした。

s e n c e 0 2

そして、翔一が来てほしくない日が来てしまった。今日は翔一と愛と優と美咲。そして唯が美咲の家に泊まる日だ。が…

P M 1 : 0 7

「翔ちゃん！！今日は私唯ちゃんの事迎えに行かなきゃだから先に行くね？ちゃんと来なきゃダメだからね」
と、愛は言うが…

「……スー……」

翔一は堕眠をむさぼっていた。

P M 3 : 1 0

「ぬ…今…何時だ？……ん？あー。あつー！！」翔一は跳び起き前に一応準備した荷物を掴み玄関を出た。が、ここで問題が発生した。

「俺…美咲ん家わからないじゃん……」

仕方なく家に戻りメモから愛の携帯電話の番号を探し出し電話をかけた。

P M 3 : 1 5 分着信「翔ちゃんの家」

「もしもし？今何してたの？もう集合時間とつくに過ぎて…」

「家はどこだ！？俺はわからないぞ？」

「あつ…アハハハハハ…ハハハ…」

「マジか？」

その時後ろから貸してと言う声が聞こえ声の大きさが変わり翔一は顔をしかめた。

「あんたんちの裏をずっと奥に行った所よ！！わからないの？」

この時翔一は愛の最後のハハハ……の意味を理解した。なんでわからないの？の苦笑だったのだ。「そ、そんな近かったか？」

「約一キロね。わかったら早く来てねダ〜リン」

「わかった。わかったからダ〜リンはよしてくれ。じゃっ」

P M 3 : 1 8 分再出発

「い、一キロってこんな長かったか？」

かれこれ十分近くそれなりに急いで走っている翔一だが目的地である豪邸と思わしき家はまったく見えてこない。「飯田……飯田……ここらへん飯田っていう名前結構多いぞ……はあ……」

翔一がトボトボ歩いていると前から同じ様にトボトボと歩いている人物を見つけた。翔一はこれ以上遅れたら何を言われるかわからないと、思い切ってその人物に話し掛ける事にした。

が、近づく程に見慣れた背丈と体格、そして顔が見えた。その時トボトボ歩いていた人物も翔一に近付いてきた。

「「おう。美咲^{ちやん}の家知ってるか？」」

「「……………」」

「はあ……」

「優も……か？」

「オレとしたことが……道に迷うとは……」

「俺もこんな近所で……」

この時翔一は優が大荷物を抱えていることに気付いた。

「まあオレ達で探せば…」

「いや。優…その荷物は？」

「お楽しみに決まってるだろ！」

と、ニヤニヤしながら言った。

「だからまあオレ達で探せばなんとかなるだろ？」

「優は携帯電話持ってなかったか？」

「ああ。持ってるぜ」

「美咲か愛の電話番号は？」

「……おお！」

その手があつたと優はポンと手を叩き電話をかけた。

P M 3 : 5 8 分着信 優君

「もしもし愛ちゃん？」

「優君？どこにいろの？」「うーん…近所なのは確かなんだと思うけど美咲ちゃんの家近くって飯田っていう名前多い？」

「え？ああ…えーと…ええ。結構多いと思うわよ。でも家大きいからすぐわかると思う」

その時やることの無い翔一は大きな堀に背中を預けていた。

「わかった。まあすぐに見付ける…はずだから待っててね」

「はい。また後でね」

「……で？あの鈍ちゃん男達は？」

「近くにいるみたいだけど…飯田っていう名前が多すぎてわからないって…」

「まったく…バカね…」

P M 4 : 0 0

「で？愛はなんだって？」

「ここら辺で間違いないとさ」

「よっこいしょっと。じゃあいつちよ探してみますか！」
「OK!!」

P M 4 : 1 5 分

「無いな…」

「ああ…この塀にそつてとりあえず歩いてみたのにな…ってかまだこの塀半周もしてねえしょ…」

「どんなデカイ家なんだよ…なあ優…まさか…な？」
「そのまさかだったり…しないよな？」

「ハハハ…ハハハハハハ…」
「行くぞ翔!!」
「言われなくとも」

この日端正な住宅街に物凄い勢いで走る高校生ぐらいの男子二人がいたというのが近所のオバサマ方の井戸端会議で話題になったという……

P M 4 : 4 0 分

「フウ………ここが………正面玄関か？」

「はあはあはあはあはあはあはあ」
「えーい優!!…ここが正面玄関かと聞いているんだ！」
「はあはあはあ…多分…」

翔一はまだ大丈夫だがたいそう大きな荷物を背負い走った優はとて

も苦しい。たとえ体育の授業で凄い活躍をしていたとしても…あたり前である。

ついたと確信した所で翔一がインターホンを押しその大きな和風の…大きすぎる和風の門を開けた。すると中の様子が明らかに、二人が感嘆の声をあげる。

「これは…ヤバいな…」

「なあ翔…市長ってこんな金持ちか？普通…」

「さあ？…知らないなあ」

そんな疑問を考えつつも足を前に進める二人。

だがどこからか犬の鳴き声。と、言うよりも遠吠え。しかも一匹や二匹ではない。凄い数だと予想される。その時優に電話がかかってきた。

P M 4 : 4 3 分着信 美咲ちゃん

「もしもし美咲ちゃん？どうしたの？」

「いやあね？今番犬が遠吠えしたでしょ？アレらは多分翔一君とその他一名を捕獲って言つか…捕まえに行くのよ。だから気を付けてね。じゃっ！！」

そっとうと電話は一方的に切られてしまった。

「なんだって？」

「オレはその他一名か……」

「はっ？何言ってんだよ？」

「とりあえず家まで急がないとワンちゃんに食べられちゃうぞ。だつて」

「それって不味いよな…」

青ざめた顔になり始めた二人は一目散に駆け出したが、家はかなり

遠い。ましてや犬が大量にやってくると言つのを聞くと更に遠く見えてくる。

「やばい…疲れた…」

しばらく走ると急に優のスピードが落ちた。

それにすぐに気付き翔一が声をかける。

「優力バン貸せ!!」

「なるべく振らない…様に頼む…」

こんな時でも中身の事を忘れない男、優。

「こんな時もかよ……つてお前渡した途端に速くなるって…」

その通りにグングンとスピードをあげていく優。そして頭だけ軽く後ろを向き笑い始めた。

「ナハハハハハハハ！バカなヤツめ！犬に食われてしまえ！」

と、言つた所で急に優は足を止めた。そしてそれに気付き翔一も足を進めずに駆け足の状態になった。「どうした？優？速く行かないと食われるぞ」

「はあ…犬…いない。騙された…」

「はあ？」

この時翔一も足を止め後ろを向く。確かに犬は居ない。しかし鳴き声はする。

「防犯装置つてやつか？」

「美咲ちゃんにやられたな…」

「確かに…」

普段ならば怒りそうな翔一も時間に遅れてしまった自分が悪いと心の中で納得した。

P M 4 : 5 6 分「翔一君達まだ来ないのかなあ？良い加減着いてもおかしくないのに…」

「た、多分防犯装置にびっくりして帰っちゃった…とか？」

「うーん…翔一君ならまだしも優君なら有り得る…」

と、真剣に悩む美咲を見て苦笑した愛だったが、

「男が居ないから聞くけどさあ…愛ちゃんって…翔一君のこと…好きなんだよね？」

この美咲の一言で愛の顔が一気に変わった。

もちろん真っ赤に。

「ま、まさかね！ほらっ。小さい頃からの仲だし、…翔ちゃんだっ
てそんなこと思ってないよ」

そこで今まで椅子に座りジツとしていた唯の体がビクツツと動いた。

しかしそれに気付かず二人は話続ける。

「だって愛ちゃんさ。私といるときも絶対翔一君の事話すんだもん。
それにその顔。絶対想ってる」

「そ、そんなこと…」

「じゃあさ…アタシが翔一君の彼女になっても…良い？」

「……………」

「私になる…！」

二人はビクリと体を起こし唯を見た。

長い髪の毛が軽く波打っていた。

「じゃあ…唯ちゃん！！アタシと勝負ね！アタシが勝つか。唯ちゃん
が勝つか。愛ちゃん。ちゃんと見ててね！」

「う、うん……………」

実は唯が翔一を想っているなどとは全然知らずに愛はびっくりして
いた。

「今日どれだけ翔一君に近付けるか…美咲ちゃんには負けない！」

「ほお。言ってくれるわね。」

ここでガチャリと扉が開き、見知った顔が二つ出てきた。

「オッス。遅れて悪いね！って…美咲ちゃんと…アナタが唯ちゃん？もしかして喧嘩？どうしたの？愛ちゃん？」

「ちょ、ちよつと…」

と、顔を下に向けた。

美咲と唯も顔を赤く染めて、椅子に座った。

「おい。優…お前体でかいんだからさっさと退けよ！」

「おつ。悪い悪い」

「おゝ暖かいなあ…って…」

そして唯の存在に気付き、近付いてうつ向いている顔をのぞき込み、愛に質問した。

「この娘が唯って娘？」

愛は顔が赤いのが恥ずかしいのかうつ向きながら首を縦に降った。

「そつか。初めまして？それとも会った事あったかな？」

と手を差し出す翔一。それに合わせて唯も手を差し出し顔を上げた。身長は愛が一番小さく、一番大きい…と言うよりも標準ぐらいなのが美咲。

そして唯が愛よりほんの少し小さいぐらいだと翔一は感じた。目は二重ふたえでくつきりしていて整った顔立ち。何よりも黒い髪の毛が大和撫子の雰囲気を出している。

「私…貴方と同じ組でした…」

「あつ…ご、ごめん…」

と翔一は顔をしたに向けた。

「私、大宮唯と申します。よろしくお願いします」翔一は急に深ぶかと頭を下げられ戸惑いつつも、

「あ、ああ。こちらこそよろしく」

と笑顔で返した。

ここで優が今まで自己紹介をすることを忘れていたのか唯に自己紹介をした。

「お、オレは、優だ。」翔一は急に深ぶかと頭を下げられ戸惑いつつも、

「あ、ああ。こちらこそよろしく」

と笑顔で返した。

ここで優が今まで自己紹介をすることを忘れていたのか唯に自己紹介をした。

「お、オレは、優だ。楠木優。よろしくね。唯ちゃん。」

「はい。」

と唯に笑顔で返されニヤけていた。が…

「何に男共はニヤニヤしてるのかしら？」

「ちょ…美咲ちゃん…」

危ない美咲を愛はとめようとしたのだが、暴走モードの美咲は止まらない。

「美咲！！俺はニヤけてなんか…」

「うーん…まあ翔一君は許してあげる。でも…」

と、優を美咲が睨みつける。

優はまるで蛇に睨まれた蛙の様にピクリとも動かなくなった。

「お、お待ちください美咲様…オレ…ワタクシはニヤけて等おりません。」

「ふっ。そのような戯れ事を…見苦しい！！腹を斬れ！！」

「お許しを…」

と優が美咲に土下座をしたのを見て唯は目を白黒させている。翔一と愛は苦笑しながら目で合図をする。

「そろそろ美咲を止めるよ愛。」

「だね。」

昔から一緒に遊んでいた。幼馴染みだけに出来る技である。「はい。

美咲ちゃん。そろそろ可愛そうだから優君のこと許してあげて？」

「う、愛ちゃんが言うなら…」

愛の一言により美咲の優イジリはここに終局を迎えた。しかしここで新たな問題が生まれる。

「じゃあ晩御飯は…」

との翔一の一言からである。

「^{アタン}私が作る！！」

美咲と唯が新たな火種を…いや、むしろ翔一が火種を撒いた。

「あー。じゃあさ…女の子で作って男は部屋の掃除。これでどう？」
争いが起きては困ると優が口を開いた。
しかし…

「ご飯の前に掃除をしたらホコリが舞うからダメ」

と、愛が言い、男の子はじっとしてて。と続け、その凄い女の子の勢いに

「「はい」」

としか言えなくなった男子兩名。

一色即発かと思われたが何事もなく始まった料理。

その料理中に男子の密談が始まった。

「なんか…美咲ちゃんと唯ちゃんの間…天気悪くないか？」

「確かに…」

優の一言におおいに頷く翔一。この二人はあの二人の戦いを知らない。

しかし美咲と唯が争いを起こしている事は晩御飯後に翔一以外が知っているというもの変わる。

その理由は晩御飯中に…

「はい。翔一君。これアタシが作ったの！食べて？美味しいから」
「いえいえ。翔一君。これは私が作ったのよ。食べてくださる？美咲さんのより美味しいですわ」

と、明らかに美咲と唯が翔一に作った物を食べさせようとしていたからである。

苦笑を浮かべながらも翔一は二人の作った物に箸をつける。

しかしどちらも何を作ったのかわからない。

美咲の皿の方は黒い灰の塊で、唯の皿の方はお湯の中に肉が沈んでいるだけだ。

その黒い塊を食べた直後に翔一は水を飲み、お湯を一口飲んだ後に愛の作った味噌汁を飲んだ。

「どう（ですか）？」

二人の質問攻めにあつた翔一は

「自分一人では良い答えが出ない」

と、優にも食べさせるよう勧めた。そして案の定…

「さあ優君。さあさあ。」

何故かこういう時にそろう二人の言葉に圧されて箸をつけ、水を飲み、味噌汁を飲んだ。

そして二人の厳選結果が出揃い、翔一が口を開いた。

「えーと、二人とも？…その…うん。愛から料理を教えて貰おう」

その後日愛は二人から質問攻めにあっていたらしい…

s e n c e 0 3

そして大問題の晩御飯をなんとか終了したわけであるが…また更なる問題が翔一に降りかかる。それは…

「ちよつと！唯ちゃん？離れなさいよ！」

「美咲さんこそ離れたらどうですか？ねえ翔一君？」

翔一と無理矢理腕を組み、離れようとしなない二人。

「ちよつと二人とも…」

と、声をかけるがさすがの愛も困惑気味である。

「それで…翔一君はどちらに腕を組んでいて欲しいのですか？」

「いや…あの…」

「もちろんアタシとよね？」

「いえいえ私とよね？」

「……………」

もちろんどちらとも言えない翔一。優に助けてという視線を投げ掛けるも首を振り目で

「頑張れ」

とでも言っているかの様だった。

「あつ。美咲ちゃん！」

「えっ？アタシなの？やっぱりね？」

「いや…そうじゃなくてお風呂…」

「え？あー…アタシと入る？」

「…優と行きます」

「玄関曲がつてすぐだから」

「ありがとう。優。行くぞ！」

「りょくかい。じゃっすぐ揚がるからね」

と言って部屋から出て、しばらくした所で翔一が口を開いた。

「…なんなんだ？あいつら」
「いやいや…ってわからないのか？」
「うーん…変なノリだなあとは思ってたけど…」
「ノリか！？あれがか！？」
「えっ？じゃあなんだって言うんだよ？」
「……………まあ風呂入ろうぜ」
「あ、ああ」

一方その頃皆が集まる部屋では…

「……………」

「アタシ！！」

「私です！！」

いまだに言い争いをする二人と愛。先程まではただ呆れるだけで済んでいた愛も段々と腹立たしくなってきたのである。

丁度その頃翔一と優は昔話をしていた。翔一が愛と小さい頃喧嘩をした話である。

「いやあ…愛を怒らせるのはなかなか難しいんだよ。でもよ、怒らした後機嫌を取り戻すことが更に難しいんだよな」

「へえ…俺も気を付けなきゃだな。うん」

しかし今言い争いをしている二人はその事を知るよしもない。そしてついに…

「良い加減になさい！二人共！！さっきから子供みたいにキヤーキヤーと」

今までに無いほどの剣幕に急に二人は黙りこみ下を向いている。

「さっきから同じ様な事ばかり繰り返して、馬鹿ですか貴方達は！

もう止めにしなさい」

「は、はい」

二人はあまりの怖さにはいの一言。

「解ればよろしい」

と、許した様な言葉を出した愛だがやはりまだ何か危険な雰囲気を出している。

その時扉が開き優と翔一が姿を表した。

「どうしたのみんな？空気が悪いよ？」

確かに空気が…正確に言えば雰囲気が悪い。

「なんにもないわ」

との愛の一言。そして…

「だから優！！戸口で立つな！」

と優の大きな体を押して翔一が入って来た。

そして翔一からももう一言。

「愛？…どうした？」

「だからなんでも無いって」

「なんでも無いって…しょうがないな。愛ちよつと来い。外の空気吸いに行こう？」

「うん…」

そして二人は外へ行って部屋に残ったのは三人。

「で？愛ちゃんを怒らせちゃったわけね？」

「う、うん…」

美咲が口を開いた。

「でも…」

「怒らせちゃったのはしょうがないよ。でもちゃんと謝らなきゃダメだよ？」

美咲が口を開いたがその上から被せる様に優が言った。

「り、理由は聞かないんですか？」

今度は唯が口を開く。

「うーん…言いたかったら聞くけど…言いたくないなら言わなくて良い。もちろん本当は聞きたいけどね」

とニヤリと優は笑った。

そして二人はそつと目配せをし、優君なら大丈夫と話すことにした。

「じゃあ…」

その頃外では…

「あいつらが居なきゃ話してくれるだろ？何があった？」

「……翔ちゃんには関係無い」

一度怒らせたら大変。確かにそうである。しかも今回の場合は翔一に關係しているのだから尚更言えるわけがないのだ。しかし翔一はそんなことわからずに、

「関係無くは無いや。今日泊まりだろ？周りの雰囲気とかさ…それにみんな同じ高校だろ？そしたらもつと大変だぞ？」

そこで愛は深呼吸して笑って見せた。

「もう大丈夫。私は二人が謝ったら許すし私も謝る。」

その愛の笑顔に違和感を覚えつつも昔から頑固性だという事を思い出し、

「じゃあ俺は先に…」

行く。と言おうとしたが愛が

「あ、私も行く」

と言ったので

「じゃあ行くか」

と行って二人で離れに入って行った。「へえー。そういう訳ね。だいたいわかってたつもりだけど、これで繋がった」

「お願いだから翔一君には…」

「OK!! 優君にみかしといてよ! 本気で何も言わないさ。ただ…」
「ただ?」

そう言えばこの二人妙にハモるな。とこの時優は思った。

「あれだと明らかに翔にバレルよ?」

と笑った。すると美咲は顔を下に向け、唯は顔をほんのり赤く染め、口を開きその口を両手で抑えた。

(二人とも天然か? それとも馬鹿か?)

と苦笑し、頭を抱える優だった。

とそこでまた扉が開きそこから翔一が現れた。

「あれ、翔? 愛ちゃんは?」

と優が尋ねると翔一は、

「帰った」

と一言呟いた。その一言で唯と美咲は顔を見合わせ慌てた。が…

「翔ちゃん!! 私はいるでしょ!!」

「イテテテ! 冗談だってば!」

「もう。勝手に人を帰った事にしないでよ!」

愛が翔一のお尻をつねった事で大丈夫だと美咲は確信した。

「あ、その… さっきはごめんね。勝手にうるさくしちゃって…」

と、美咲が最初に謝ると、

「私もごめんなさい… 愛ちゃんの気持ちも考えずに…」

と唯も続けて謝った。

「気にしなくて良いわよ。そもそも私が勝手に怒っただけだしね…
ただ…」

「…ただ?」

(またハモったよ…)

優は思った。

「その

「愛ちゃんの気持ち」

「つてのが妙に引つ掛かるんですけど？」

と唯に冷たい視線を送る。送られた唯は慌てた様子で

「アハハハハハ…」

と誤魔化した。が…

「誤魔化すんじゃない」

と愛に追い掛けられていた。しばらく時間が経ち、PM10:00を過ぎていた。そしてその時女性陣はお風呂に行っている。

「んじゃそろそろアレを出すかね」

「は？優？アレってなんだ？」

「まあちよつと待ってろつて」

つて不可解な笑みを溢し大きなリュックを持って来て、

「よっこいしょ」

という言葉を発してリュックを置いた。

「そう言えばそのリュック相当思いけど何が入ってたんだ？」

と翔一が聞くとリュックの中から大量の酒が出てきた。

「……………」

「ちゃんと買つて来たぜ。ほら。今日は俺のおごりだ」

「……………愛が怒るぞ？」

「愛ちゃんならわかってくれる…はずだ。それに飲まないって言うなら……………」

と優が手を伸ばすが、

「飲む」

と行つてカンを開けて飲み始めた。

またそれからしばらく経ち優の顔がほんのりと赤くなってきた頃、

女性陣がお風呂からあがってきた。が：最初に戸を開けた愛はしばらく呆然とし、口を開くと、

「それは？」

「お酒」

翔一が答える。

「それは見ればわかるでしょっ！！なんでここにあるの？って聞いているの！！」

「優が持って来た」

そして美咲が戸から部屋に入って来た。

「あゝ！！お酒飲んでるゝ」

「おー！！美咲ちゃん。一緒に飲むかい？」

と、少し酔った優は美咲に勧める。

「それよりも…」

と美咲は食器棚を開けてグラスを出して、翔一からカンを奪い取ると、

「はい。翔一君どうぞ」

「ん。サンキュ」

その光景を見ている愛は呆然とし、椅子に座ると、じつと翔一を睨み突けた。

「な、何だよ？愛？顔に何か着いてるか？」

「別に」

「あ。愛ちゃん。ジュースも持って来たけど飲む？」

と優が優しく声をかけると

「少し」

と短く答えた。優はその

「ジュース」

を八分目ぐらいいまでグラスに注ぎ愛の前にそっと差し出し、

「オレンジの炭酸ジュースだよ」

と付け加えた。それを愛は口に運んだ。そして一言

「このジュース美味しいね！どこの会社の？」

と、優に聞く。が、それを

「お酒です」

とは言える筈もなく、

「んゝ外国のだからわからないなあ」

と答えた。ちなみにこの愛が飲んだお酒は

「スクリュードライバー」

と呼ばれ、ウォッカ等にオレンジ果汁を入れた物である。オレンジの香りでほとんどお酒の臭いが消えるため、お酒のあまり飲めない女性もジューズと勘違いしガブガブと飲んでしまい、酔い潰れてしまうという。別名女殺し。そしてそれを知ってか知らずか優は愛にスクリュードライバーを飲ませたために愛はガブガブと飲んでゆく…そして遂に…

「おい。愛？生きてるか？」

答えは無い。美咲が耳を愛にそつと近付けると寝息が聞こえて来る。

「愛ちゃん寝ちゃったみたい」

「じゃあ俺が部屋に寝せて来るよ。女子の部屋はどこ？」

「二階あがつて…右に曲がつて一番奥だよ！荷物が置いて有るから解ると思う」

と、少々酔い気味に言い、またグラスに口をつけた。

「ほいじゃちよっくら行つて来るわ」

翔一が席を立ち、愛をおんぶした。

「翔。お前は大丈夫か？」

と、優が尋ねるが、

「俺はまだほとんど飲んでねえよ」

と、苦笑いを溢し戸を開けて階段をあがった。スースーと寝息を溢す愛を背に少し胸が気になる翔一である。が、昔からの
「友達」

で有るために何も思わない。ただ男だから。である。

階段を右に曲がり真っ直ぐ行つた所に扉があり、引き戸を愛を起こさないようなんとか開けるとそこにはかばんがあり、布団も三つ敷いてあつた。

その一番奥に愛をゆっくり降ろすと、布団をかけた。そして、

「ったく… あんなガバガバ飲んだら誰でも酔うだろ。気を付けろよ。」

と一言漏らしドアノブに手をかけた。しかし、

「誰？」

と愛の声が聞こえ翔一は引き返した。

「俺だよ」

「翔ちゃん？」

布団から顔だけ出して目を開く愛の頭をなだめるように撫で、

「お前ジューズ呑みすぎたんだ。ゆっくり寝てろよ」

と言つ。

「あたまがちよつとぼかばかするなあ… かぜひいちゃったかな。わたしはねるからみんなにいつておいて」

と言つて目を閉じた。

そんな酔つた愛に苦笑を漏らし翔一はさっきの部屋へと戻つた。

「あ。翔一君。どこに行つてたんですか？」

と、さつきまで居なかつた唯が部屋にいた。

「ちよつと愛が酔つて寝ちゃったからさ。つて二人に聞いてないのか？」

と二人を見るが…

「オレだつて… こんなオレだつていろいろ考えてるんだぜ？それなのによ…」

「わかるわ。まーくんの気持ち。アタシだつてさあ…」

と完全に二人の世界に入っている。これでは何を言つても無駄だろうと翔一は思った。

そして戸の近くで立っている二人に今気付いたような口ぶりで優が話かけた。

「おう。お二人さん。そんな所で立つてないで座った座った!!」
その様子は酔って太っ腹になった親父さながらである。

「あいあい。まあ唯ちゃんも座ろ」

と、翔一は椅子に座り、唯もその隣に座った。しかし唯が翔一の隣に座ったのが気に入らないのか美咲はぷくと頬を膨らまし椅子を翔一に近付けビールを注ごうと翔一の前のグラスにカンを傾ける。

「あ、美咲サンキュ」

とそのビールを口に運ぶ翔一。そのとなりでは何か言いたげにニヤリと笑う美咲。それを見た唯は自分もしようと優から新しいグラスと酎ハイを貰いグラスに注ぎ、一口飲んだ。そして、

「翔一君。こちらもどうぞ」

「あ、ああ…ありがとう」

翔一は女性二人に押され気味である。

そしてもう一人の男はふと冷静になりぼつと翔一を見ながら小学校からの翔一との付き合いについて考えていた。

そもそもこの二人はあまり家が近くない。しかし同じ学校で、気が合い遊ぶようになった。

学校で…公園で…翔一の家で…なにもないただの空き地で…いろいろやった。喧嘩だつてやった。一緒に泣いた。

しかし翔一はまったく恋愛には興味をしめそうとしないのだ。

(やつぱり…愛ちゃんのかね…こいつは…)

しかし優は決して翔一と愛をくつつけたくない訳ではない。むしろその逆だ。

ただ、あんなに近い存在にいる愛、いつも一緒にいる異性に対してなんの興味も持たない翔一に疑問がある。

「…い。おい!優!!生きてるか?」

急に翔一に話し掛けられ現実に戻ってきた。そして笑顔を作り、

「悪い悪い。ちょっと酔ったかな。で?なんだ?」

と笑いながら言った。

「お前が俺を見つめてたんだよ！！お前結構飲んだからな。気を付けろよ？」

いくら優でもグラスを二本も持たされ両手に花の状態の男に言われたくはない。そんな事を考え苦笑しながら、

「もう大丈夫だ」と言っ

た。そして夜は深まってゆく…

s e n c e 0 4 (前書き)

過去の話が入ります。読みにくくなりましたがよろしく願います。

あれからかなり時間が経ち日付は既に変わっている。そしてあまりお酒を飲まないであろう女子二人は寝てしまった。

「ふう。優。お前まさかこれぐらいで酔ってねえよな?」

「当たり前。さっきは酔ってたふりをしてただけだ。まだ酒も少し有るし…この寝てるお嬢様方をお二階に運ぼうか」

「そうだな」

と翔一は小さい唯の方を。いや。決して美咲が太っているとかなんかそういうわけでは無いのだが…

優は美咲をおんぶし、戸を開けて二階に行った。

登りきり右に曲がり真っ直ぐ。そこにさっき来た引き戸があった。

そこを開けて二人は降ろすと静かに部屋を出ていった。

「そういえばさ。優…」

「多分同じこと考えてるよな…」

「俺達はどこで寝るんだ?」
「オレ」

「まあさ…飲んでから考えようぜ?翔」

「あいよ」

先程の部屋に戻り翔一と優は二人、椅子に座りお酒をグラスに注いだ。チンという音を発しグラス同士で当たり、そして二人はお酒を飲んだ。しばらく経ってから優が口を開いた。

「そういえばお前と二人で酒飲むの久しぶりだな」

「そうだな。…中学一年の頃か?俺の家で飲んだのを見付かって」

「それで翔のお袋さんに滅茶苦茶言われておこられたんだよな」

「今思うと母さんも怒りすぎだよな!あそこまで怒るとは…」

「しかも二人で小遣い叩いて買った酒を没収して20歳になったら返します。だからな」

「あれには参ったぜ」

そして二人は笑った。

そして優は内ポケットから煙草とライターを取り出しくわえて火を着けた。

大きく吸い込み煙を吐く。

「あ、翔！悪いけど窓開けてくれないか？」

「ったく！吸うんなら自分で開けるよ」

「悪い悪い。まあお前も吸えって」

「これも久しぶりだな」

「ああ。まあオレはなんか考え事をする時に吸うんだがな」

「俺はあの時からだな。ほら。一緒に喧嘩売られてやり合った日」

それは中学二年になりたての四月。

「おい。翔！明日は用事無いか？」

ある金曜日の昼休みに隣のクラスから優がやって来て、翔一に尋ねた。

「それは俺に皮肉を言ってるのか？ある筈がないだろ？」

と、給食を食べて眠そうな目を擦りながら言った。

すると優はニヤリと笑い、

「じゃあ明日はオレと街にお買い物だ！」

と言い放ち、翔一は面倒だと断ろうとしたのだが、断ると明日は何

もすることが無いので着いて行く事にしたのだ。

そして土曜日になり、翔一が目覚ますと目の前には優がいたのである。

「はあ？お前なんでここに居るんだよ！？」

「そりゃあ迎えに来たからだろ」

「とりあえず着替えるから居間行つて待つてくれよ」

AM9:30

翔一の準備が終わり、街へと出発した。自転車に乗り約30分。住宅街の景色から街の大きなビルやスーパー等の景色に変わった。そして、

「この店だ」

と言つて自転車を止め優は看板に

「雑貨屋クリスタル・メール」

と書いてある大きな店に入つて行つた。

翔一も中に入ると通路は狭く何やら奇妙な物が陳列している。

（つたく…優の野郎こんな所で何買おうってんだか…）しかしどうした事が優を見失ってしまったのでこんな狭い所をうろつくのも嫌だなと一回店の外で待つことにした。

優が入ってから15分程経つがなかなか優が来ない。

そこで翔一は仕方なく店内に入つて探す事にした。のだが翔一が正面玄関をくぐるその時に奇妙な声と音が聞こえ、（何かあるのか？）と周りを見渡したが何も無いのでそのまま中に入つて行つた。

しかし店の中をどんなに探しても優の姿が全然見当たらない。

（おかしいな…中に入つてったのにな…）

そしてもう一度外に出て覺えたての煙草に火をつけようとした時に、

店の脇道から何やらチャラチャラした男達が5人出てきた。その男達はケラケラと笑いながら姿を消し、翔一はまさか優に何かあったのではと思い男達が出てきた店の脇道を行く事にした。

(つたく…なんだよここ…薄暗いし汚いし…)

そんな事を思いながらちようど店の裏側に来ると見慣れた体が店に背をもたれていた。

「おい！優！？」

翔一はすぐに駆け寄り優に声をかけた。

「あの変な野郎共か？」

「ああ…」

「理由は？」

「店の中でお前探してたらここに連れてこられたんだ。この店は俺達の縄張りだ。とか行つてよ」

優は14歳にして凄い体格になっていて、あだ名で熊ちゃんとも呼ばれている。確かにチャラチャラした男達が中学生とわからないのもわかる。…が、今の翔一にそんな事は関係無いのである。くだらない理由で大事な仲間をボコボコにした男達に対して怒りが込み上げてきていた。

「優。買い物は？」

「まだだ。」

「来週…もう一度来ないか？」

「へえ…リターンマツチね。良いねえ」

優が煙草に火を着けた。と、

「そついえばお前の顔汚ねえな」

と翔一は煙草に火を着け優の痣だらけの顔を見て笑った。それから一週間、学校では明るくて有名な優の顔が青いと話題になったが先生には特に聞かれる事はなかった。聞かれても、

「いやあゝ。寝惚けて階段から落ちちゃったんですよ」

と笑いながら説明し、クラスメイトを笑わせていた。

この日翔一は珍しく早く起き、髪の毛を櫛でとかし、朝食をしつかり食べて優を待っていた。AM9:30

前回と同じ時間に行こうと言っていたのになかなか優が来ない。
（寝坊したか？いや…あいつにかぎってそんなことねえな。そのうち来るだろ）

翔一はそう思いしばらく待つ事にした。

AM9:45

しかし15分が経っても優は来ない。翔一は電話を持ち押し慣れた番号を手早く打ち出るのを待った。

しばらく経つとカチャリという音がなり、

「はい。もしもし？」

と、優の母の声が聞こえ、

「もしもし？黒鳥ですが、優君はいらっしゃいますか？」

「あ…九時過ぎぐらいに出かけたわね。なんか結構急いでたけど

…」

「あ、はい。そうですか…わかりました。質問します」

「はい。ごめんなさいね」

と電話が終わった。

翔一は優の家は知らないがいつも遊ぶ時に来る時間から考えてもおかしいと思い、街へと出発することにした。

丁度玄関を出ると愛に会い、

「あ、翔ちゃん！どこに行くの？」

と尋ねられたが、今の翔一には愛としゃべっている余裕はなく、

「ちよつと街行ってくる」

と自転車に乗りグングンスピードを上げて行った。

「あ…翔ちゃん…私も行くんだけど…って…速いなあ。さすが男の子。さあ、私も早く美咲ちゃんの家行かなきゃ」
と、愛も自転車に乗り美咲の家へと向かった。

その頃翔一は立ち漕ぎてさらに自転車のスピードを上げ、街へと向かっていった。

（あの野郎…逃げたか？いや…一人で勝手に行きやがったな）

そんなことを思いながら翔一は自転車のスピードを更に上げていった。

その頃街では優は例の

「雑貨屋クリスタル・メール」

へとやって来ていた。

（一人で来ちまったけど…これは俺の事だからな。わりいな翔…）

「おう！いつぞやの野郎じゃねえか！またやられに来たのか？」
と今日は四人でチャラチャラした男達の中で金髪の男が優に話かけた。周りの男達は笑っている？

「あ？テメエら潰しに来たんだよボケが！」

「あれ？こいつおかしい事行つてねえか？殺しちゃう？」

「やれるもんならやってみるや」

まさに一触即発、いや…既に始まっている。

公衆の面前では不味いと男達の一人が言い前回と同じ、

「雑貨屋クリスタル・メール」

の裏へと移動した。

「んで？性懲りもなくまたこうやって来たって事は…死にたいんだ

な？」

と言い四人で優を取り囲む形となった。が、それを見て優は薄ら笑みを浮かべ、

「たからにや何も出来ねえ奴らには負けんさ」

と言い放った。それに金髪の男はカツとなり最初に動き、それに合わせて他の三人も動いた。その時優の目つきが変わりこう呟いた。

「頭悪……」

まず最初は最初に動いた金髪の男の方を向きあちらの走ってくるタイミングに合わせカウンターの準備をする。最近優が見たボクシングのテレビでこれは使えろと練習する相手は居ないもののやってみる事にしたのだった。

しかし男は走り飛び蹴りをしてきた。これではボクシングではカウンターは出来ない。でもそこはそれ。優は冷静に避けてハイキックを頭に決めた。

それを見た男達は足を止め何故かニヤリと笑った。そして男達の一人在金髪の男に話かけた。

「おい。そんなんでやられねえよな？」

金髪の男は立ち上がりポケットからナイフを出し笑った。

「これで終りだ……！！」

狂ったような声を出しナイフを振り回しながら優へ突進した。

（あちゃ……ナイフは想定外だなあ……）

これは不味いと優は後ろへ下がる。がすぐに店の壁に当たり完全に逃げ場がなくなった。

「へっ。追い詰めたぜ……」

一歩、そしてまた一歩と優に近づく金髪の男、そして金髪の男がナイフを振り上げた時に優は目を瞑ってしまふ。

「うおりゃ……！！」

優の聞き慣れた声が路地裏に響き目を開くと翔一が笑ってこう言った。

「ヒーローは遅れて来るもんだろ？」

「へっ…ヒーローはオレ様一人で十分だってえの」

と罵り合いつつ背中と背中で向かい合わせすぐに臨戦体制に入った。

「優。お前何人？俺が全員やるうか？」

「へっ、まさか。これからって時にお前が来たただけだ」

「じゃ面倒だから半分こな」

「了解」

優と翔一の話が男達を逆撫でしたのか金髪の男も立ち上がりまた一斉に二人に向かってきた。

翔一は最初にパンチを腹に一発貰うもひるむ事無く相手の顎を拳で打ち抜き一人をノックダウン。もう一人の鼻にピアスが着いている男は向かってきた所を体育の柔道の授業でやった大外狩りで倒し体に馬乗りになり、殴り続けた。失神したと判った所で一人一発ずつ踏みつけ煙草に火を着けて優の方を見た。

すると優も同じ様に煙草に火を着けてこっちを向いた所だった。

「ザコだったな」

「優こんな奴らにボコボコにされたのか？」

「……まあいいじゃん。表出ようぜ。ここ下水のにおいで臭いし」

二人は笑いゆつくりとその場を去り店の前に戻った。

すると丁度そこに愛と美咲が自転車を止めていた。

「あ。翔ちゃん！……それ…それは何？」

「煙草だけど？」

「そうじゃないでしょ？なんで煙草なんて翔ちゃんと優君が持つてるの？って聞いているの！火も着いてるし」

「吸ってるから」

愛の問いに手短に答え煙草を口に運ぶ。が…愛は翔一と優に手を出している。

「ん？小遣いか？」

「違う！没収です！！」

「えゝ。愛ちゃん酷いゝ」

「優君もそういう言い方してもダメな物はダメなの！」

二人は溜め息をつきそつと目配せをすると仕方なくポケットに手を入れ愛に渡し、愛は

「よろしい」

と言い、

「二人が二十歳になったら返します」と付け加えた。

「あれは面白かったな！」

「愛が来たのは予想外だったけどな」と二人は笑った。

それから約一年の間翔一は全く煙草を口にしていなかった。が、今回は少し酔って気分が良かったため罪悪感を感じないらしい。煙草を口に加え吸い、空気を吸う。しかし…

「ウエホツ！ケホツ！！」

翔一はむせた。

「ワハハハハむせてやがるぜ！！」

「仕方ないだろ。久しぶりなんだから」と苦笑いで言った。

「おい優…この煙草タールいくつだ？」

「14」

「……」

普通の人なら当たり前である。敢えて言わせて貰おう。未成年の喫煙・飲酒は法律で禁止されています。と。

しっかりと部屋の窓を開けて換気をして（煙草の臭いだけでなく、酒の臭いもある）ゴミ等の後片付けをして二人は二階へと向かった。

部屋は階段の一番近くに男子用と紙が貼られていたので、意外とすぐに判った。そしてつかれたのかその部屋からはすぐに寝息が聞こえたのである。

s e n c e 0 5 (前書き)

今回は短めです…

まだまだ朝方は寒い。しかしその寒さにも負けずに空を飛び交う鳥達。

端正な住宅街にも朝がやって来た。もちろん大きな飯田邸の庭にも朝日がサラサラと流れ込んでいる。

しかし離れの家だけは違う。ただし二人を除いてだが…

「皆さん朝ですよー！ご飯作ったから起きてー！！」

と男子の部屋をノックし、女子の部屋の美咲を起こす。

直接起こされた美咲を体を上げると頭がズキズキ痛み一瞬顔を歪める。

「ほら。美咲ちゃん起きてー！！」

「うん…起きたけどさ…愛ちゃんは朝強いね」

「ちゃんと寝ましたからね」

とニコニコ答えた。

そこで美咲は唯が居ない事に気付き愛にどうしたのか問う。

「あ。唯ちゃんも朝早くてね！今お風呂入ってる」

本当は唯も朝食を作ると言ったのだが昨日の料理を思い出し愛がお風呂でも入ってゆっくりしててと言ったのだ。

「はい。じゃあ準備出来たら下に来てね！」

「うん」

翔一と優の姿が見えないので愛はもう一度男子の部屋をノックした。しかしうん。ともすん。とも言わないのでドアを開けて起こしに入った。

「ほら！翔ちゃん！優君！起きてご飯食べよう！」

「うー…唯ちゃんと美咲ちゃんが作った料理は…」
と、寝惚けた優が体を起こし口を開く。

それを見て愛はクスクス笑い、

「私が作ったから」

と優に言った。その途端優の目が輝き準備を始めた。後は翔一だけである。

「ほら。翔ちゃん？起きないとご飯抜きだよ？」

「美咲と唯ちゃんのだったらいらない」

まったくこの二人は考える事があまり変わらないのである。しかし考える事が同じでも運は違う。その言葉をちょうど支度をし終わって下に行こうとした美咲に聞かれたのだった。

「へへ。翔一君？私の料理だったら…何？」

「……」

こうなったら寝たふりと決め込む翔一と引き下がれない美咲。そこで愛が翔一にそつと耳打ちをした。

「帰りに犬に追い掛けられちゃうよ？本当はいるんだって！」

翔一は何も言わずに体を起こしテキパキと準備を始めた。翔一は実は犬が苦手である。可愛いとは思うのだが大きな犬が怖いのである。だからさっきの愛の一言は鶴の一声である。

唯もお風呂から上がり皆が席に座った所で優が、

「合掌、頂きます」

と言い笑いながらの朝食が始まった。

愛は母親の手伝いをちゃんとやるのでしっかりと出来る。しない人は…

「本当に愛ちゃん料理上手だね」

「本当です…」

美咲と唯は昨日の自分のと出来が全然違うのにびっくりしている。ここに料理長・愛が決定した。

朝食後女子は椅子に座りお茶を飲みながら談笑している。とても花のある光景である。だがしかし…台所違った。

「おい翔！…てめえ水弾き過ぎなんだよ。気を付けろ！」

「うるせえ！てめえが洗剤無駄使して流さなきゃいけねえ泡の量が増えてんだよ！！この環境破壊野郎！！」

「なんだと喰らえ泡攻撃！！」

……とても見ていられない光景である。

しばらく時間が経ち……

皿洗いの後男達は出来もしないのに、水回り、ガスコンロ、換気口の掃除をし、台所はかなり綺麗になった。

「ナハハハ！！さすがはオレ達だ！！綺麗だな。翔」

「ああ。なんだか清々しいぜ相棒」

が、掃除を全てしたのは非常に良いことだとは思う。しかしそれは場によるのだ。

それを後ろからの言葉により酷く実感する二人。

「あのー……翔一君？優君？アタシ達はなんて言いましたか？」

「え？後片付けお願いって……」

「そう。後片付けよ。アタシ達は待つてるから皿をお願い。って言うたのに……」

「まあまあ良いじゃないか。綺麗になったんだし」

そう優が優しく言うが……

「綺麗にしてくれたのは良いけど二人共？今何時？」

二人は同時に時計を見る。

「「11:30!？」」

凄まじい集中力である。いや、二人共遊びながらの様なものだったから集中力など使って居ないのかもしれない。

「12時解散予定で11時30分まで掃除ね？」

「優……ちよつとやりすぎたな……」

「あ、ああ……」

その帰り、美咲の命により、本物の番犬達が翔一と優を追い掛け回った事は言うまでも無い。

こうしてグダグダの一泊二日、飯田邸宿泊は幕を閉じた。

飯田邸宿泊からしばらく経ち暖かい陽射しが眩しい桜が咲く四月となった。その中には不安がっている者、期待している者、そして翔一は…その中には不安がっている者、期待している者、そして翔一は…AM 11:49

「ダアーツ！遅刻だぁー！！」
春休みの怠慢な生活を改善することが出来ずに高校生活初日から寝坊して自転車を必死にこいでいる。

PM 12:02

「あ。美咲ちゃん！おはよう」
愛は丁度校門の前に立つ美咲を発見した。

「愛ちゃん。おはよ。いよいよ今日からだね。…って翔一君は？一緒に来たんじゃないの？」

本当は愛も翔一と来るつもりだったのだが翔一を起こしに行ったのだが起きようとしないので呆れて先に来たのだった。

「あはは…一応起こしに行ったんだけどさ、起きないから先に来ちゃった」

愛がそう言つと美咲はクスクスと笑った。

「まあ中学の時も授業終わって休み時間もずっと寝てたもんね」
と美咲は言った。実は愛は小学校の3〜4年生の頃しか翔一と同じクラスではなかったのだ。

だから中学の時翔一がどのように過ごして居たかわからない。正直の所不満だった。だからこそこの高校こそは同じクラスになりたいのだ。

「あ。唯ちゃんも来たよ！おい。唯ちゃん」

と美咲が唯も発見し、しばらく話をした後、クラス分けの紙が張り出された所を見に行く事になった。

（翔ちゃんと一緒かな…一緒になりますように…）

愛は心の中でそう呟きクラス分けの表へと足を進めた。

P M 1 2 : 2 0

「ふ…危ない危ない…っと、オレとしたことが高校初日から遅刻するところだったぜ」

と、やって来たのは優である。優はたくさんの人だかりの中に愛達を見付け足を向けた。

「みんなおはよう」

と優は三人に声を掛けたがその場の空気が凍っている。さすがの優も返事がないと少しばかり切なくなり、とりあえずクラス分けの表を見るとこにした。

（楠木優…楠木…とあったあった。お、オレの下は黒鳥…翔も同じクラスか）

1年2組

黒鳥翔一

楠木優

（他に知り合いは…特に居ないな…って…そういうことか）

自分は翔一と同じクラスであるが他に知り合いの名前が無いことからこの娘達は違うクラスになったのか。と、理解し、とりあえずこの女の子達のクラスを見てみることにした。

（木村…木村…木村愛…あった。3組か、隣じゃん。唯ちゃんの名字ってなんだっけか…えーと…大…とりあえず大…大宮唯！あった。4組ね。最後は美咲ちゃん…飯田美咲ちゃんは5組…と）

翔一のことよりもみんなが違うクラスになったから悲しげなのかと優は更に理解し、静かにそこを離れようと一步横に動き玄関に入ろうとした。が、誰かの肩が優の肩に当たった。

「っと…すまん」

優は謝ったもののその誰かは優を見もせずに足早に玄関から消えて行った。

（ったく…近頃の若えヤツは…）

…優も若者である。

そしてPM12:25、集合五分前のチャイムがなりゾロゾロと人々は各教室へと向かった。

PM12:28

「やつと…着いた…」

翔一は自転車を全速力で走らせ学校に到着した。

息を荒らしたまま自転車小屋に自転車を止め、玄関へと急ぐ翔一。

（クラスは…？）

しばらく紙を見つめた後自分のクラスが二組だと言うことが解り、また脱兎の如く駆け出した。

（早くしないと遅刻だ）

そう思いながら内履を靴から出そうとするも急いでいる時はなかなかうまくいかないものである。翔一は靴の片方を落とし、もう片方を投げるといわるスリッパ履きのまま階段を駆け上がった。

（確か…4階だったかな？）

翔一は紙に一年生は4階と書いてあった気がして更にスピードを上げて階段を上がった。

しかし階段を上がり廊下に出ると、誰もいない状態で、一組の隣の

二組へと息を整えながら軽く走った。

「すみません！！遅れました」

そう言つて扉を開けると色々な人の視線が翔一に突き刺さる。翔一は下を向いたまま教室に入り、キョロキョロと自分の席を探すが全て席が埋まっている。

するとこのクラスの担任と思われる人物が翔一に話しかけた。

「あゝ…一年生だね？ここは二年の教室だよ？」

「へっ？」

廊下に一度出て上を見ると確かに二年二組と書いてある。

「失礼しましたゝ！！」

と、後ろを向いて言う一気に加速し、階段を上がった。もちろんその時先程のクラスから大きな笑い声が聞こえ、更に翔一は顔を紅く染め、早く行こうと加速した。階段を登りきり、今度はクラスを確認し、翔一は教室の扉を開けた。

「すみません遅れました」

「ん…黒鳥君だね？」

担任と思われる人物が翔一に問う。もちろん、

「はい」

としか言うことができない。

「俺の席はどこですか？」

ずつと下を向いたままだった翔一はこのままだと失礼と思いしつかりと先生の目を見て聞いた。

(……)

「あ……」

「この列の一番丁度真ん中だね。あと、これ……はい。いろいろ書くのあるから忘れないようにね」

「…はい…木村…先生…」

見間違うはずがない。

ショートカットで切り揃えられた髪の毛。そして幼馴染みと良く似た顔。向の家のお母さん。愛の母親だった。

翔一がゆつくりと自分の席に足を向けた時、木村先生は翔一に声を掛けた。

「じゃあ…このホームルーム終わったら体育館行くんだけど、その前にもう一回私の所来てくれるかな？」

「はい…」

翔一としてもいろいろと聞きたい事があり、願ってもない事だった。

ゆつくりと席に着き、荷物を置くと、後ろから誰かが背中をチョンチョンと叩いた。

「優か？」

「せいか…いい。良くわかったな」

翔一は顔を机に突っ伏し、優は顎を手に乗せ、二人とも口を最小限の動きで話す。

「中学のクラス替えした後一日目も同じ事しただろ」

「…お前…記憶力良いな…」

「はい。喋らない!!」

二人が気付くと木村先生は二人の真横に立ち眺め下ろしていた。

「は、はい」

さすがに気配も何も感じなかった翔一はびつくりし、体を跳ね上げ返事をした。優はあまり関心が無さげに時間を少し開けて、

「は…いい」

と言う。するとまたゆつくりと喋りながら先生は教壇へと戻って行った。

それからしばらく時間が経ち生徒達は廊下に名簿順に並ぶように言われゾロゾロと教室から出た。

そんな中木村先生と翔一は軽く話しているわけだが…

「あまり時間無いから質問は後にしてね」

「は、はあ…」

「一応私教員だから、あまり…その知り合いだからって、親しくできないのよ。それで、翔一君にもちよつとよそよそしい態度をとるけどあまり気にしないでね。って言いたかったの」

木村先生は先程の態度とは違う…いつも翔一が見ていた木村さんに戻り翔一に言った。

「でも…」

「はい。じゃあみんな待つてるから急いで並んで！」

そう言うのと木村先生はそそくさと教室を後にし、廊下に並んだ生徒達の先頭に立った。

「はあ…」

溜め息を一回漏らすと翔一も列へと足を進めた。

「へえ…そうなんだ。知らなかったなあ…」

「でもまさか翔ちゃんと優君がお母さんのクラスだったなんて…」

入学式を無事終え、その後解散となった二人は愛と美咲と唯を呼び学校の近くのお菓子屋（優がどこから聞き付けた）に向かった。しかし美咲は用事があるらしく、唯は塾で三人でそのお菓子屋へと向かっているのである。

「本当に焦った…顔見た時は心臓が止まると思ったし…そういえばなんで愛は教えてくれなかったんだ？愛の母さんがこの学校勤めて

るって…」

「え？あゝ…母さんって家じゃあまり仕事の事話さないの…去年までは中学の先生やってたの。翔ちゃんわかるでしょ？それで…学校変わるけど引越しは大丈夫。ってそれだけしか言わなかったから私も全然…」

「まあゝ今年も面白くなりそうだな。翔！」

「…あまり期待しないでおくよ…」

そうこうしているうちに目的の店

「ア・ラモー」

に到着し、三人は中に入った。

店の中は白が基本色で、お菓子やケーキの入ったショーケースがあり、テーブルと座席は木をそのまま使った物であった。翔一はそんな店の中を観察していると、愛と優はガラスケースの前に立ち、すでに何を食べようかと選んでいる様子だった。

（まったく…女って甘いもん好きって言うけど本当なんだな…）

「私は…ショートケーキ…と、コーヒーで」

「じゃあオレは…抹茶プリンと、このイチゴパイっていうのください」

「かしこまりました。お客様はどちらに致しますか？」

二人は早速決め、男の白い髭を生やしたパティシエはそれを聞き、翔一に聞いた。

「あゝ…じゃあ…とりあえずコーヒーだけで」

「はい。かしこまりました」

そう言ってショーケースの中からプリンとケーキを取り出し二人に渡すとコーヒーは少しお待ちくださいと言って店の奥へと消えて行

った。

三人はあまり人の居ない店内の一番奥の席に座った。
翔一がしばらく二人のケーキを眺めていると優が口を開いた。

「……あ、翔。」

「どうした？」

「欲しいって言ってもあげないからな」

「最初から貰うつもりはないから安心しろ。それに甘いもんはあまり好きじゃないんだ」

「あゝ。翔ってそうだったんだ」

「そうなの。小さい頃からたまにお菓子作って持って行ってあげるのに翔ちゃんってちょっと甘くなると全然食べようとしないんだよ」
「だって…」

「何！？お前という奴は…愛ちゃんのお菓子を残すなんて…許されると思うのか？」

「……」

「まったく…あ、愛ちゃん。今度からオレに作って。オレはどんなに甘くてもどんなに不味くても残さないからさ」

「優君…なんかその言い方嫌…」

「今のは優が悪い」

ここぞと言わんばかりに翔一が口を開き優に反撃を開始した。もちろん優も翔一一人が相手なら問題は無いのだが愛が加わるとまったく相手にならない事をわかっておりすぐに降参した。その後コーヒが届き、三人は談笑していたのだが…

「すみません！ちょっと煩いんで静かにしてもらえますか？」

三人と同じ制服を来た男子の高校生が三人に注意をした。もちろん愛と翔一はすまなそうな顔をして、下を向き、

「すみません」

と、言っただが、優はその注意をした人物の顔を見て立ち上がり口を開いた。

「お前…お前！今朝オレと肩ぶつかったけど謝りもしなかった奴だろ！？人にそんな事言えるのかあ？」

「……あゝ。それは君も謝っていないんじゃないのかい？そもそもあんな所に立ち止まって当たるな。なんて言えないよ。普通。」

「当たるな。なんて言っただけだよ。当たったら謝るのが常識だろうがよ。オレは後ろ向いて謝ったんだぞ」

そんな会話を聞いて訳も解らず聞き入っていた翔一と愛の二人だが、ここでこの会話が一番迷惑だと気づき止めに入った。

「お前ら。静かにしろ。一番うるさくなってるぞ」

「そうだよ。周りの人の迷惑になってるよ……」

もちろん他の席の人は見て見ぬふりだが……

「なんなら君とは場所を変えて話し合いたいものだねえ……」

「おお。オレも同感だ。今から行くか？」

この瞬間愛の中で何かが弾け、静かに口を開いた。

「ちよつと…二人共？」

「大体お前があの時謝れば……」

「もともとここでうるさくしてたのは君達だ！」

「良い加減にしなさい。二人共。優君。席に座る。貴方も。」

「……」

優はゆつくりと席に腰を下ろした。もちろん青年を睨み着けたままである。青年も優を睨み着けたまま愛に言われた所に座った。

「あのね。二人共。ここはどこ？」

「お菓子屋」

青年が答えた。

「そうでしょう？じゃあ貴方達はそのお菓子屋で何をしていたの？」

「口喧嘩」

今度はノロノロと優が答えた。

（あゝあ…愛を怒らした訳だ…でも意外とこの二人合っくんじゃねえか？）

そんな二人を見て翔一は顔には出さずにそんな事を考えている。

もちろん愛は止まらない。

「なんで私が止めた時やめなかったの？」

「そ、それは…」

「だってこいつが…！」

（ハモってるし…）

「こいつが…じゃないでしょ！？良い加減にしないと…」

「ごめん…」

「悪かった」

愛の剣幕に青年が謝る。それに続いて優も無愛想な表情を浮かべたまま謝った。

「じゃあ二人共握手して」

「はっ？愛ちゃん？そんな事はしなくても…」

もちろんそんな事はしなくない優は首を左右に振り拒否をする。が…

「握手しないと…」

「しないと？」

「もう口聞かない！！」

優は静かに青年の方を向くと右手を静かに出した。

（愛って優を使うの上手いな…）

翔一は心からそう思った。

優と青年は握手を交わし一見落着くと思われたが…

「…」

青年は黙って愛を見ている。

「どうかしましたか？」

先程の剣幕が嘘の様な笑顔をで愛は青年に話し掛けた。

（おいおい…今更敬語を使っても…）

確かに先程あれだけ怒って今更敬語を使っても印象は変わらないだろう…

「い、いや…その…一緒に…」

「えっ？」

「一緒に座って良いですか？」

「はあっ!？」

もちろんその青年の言葉に優はさも嫌そうな顔を作り嫌そうな声を出す。

しかし青年はそれが聞こえなかったかの様に振る舞い自分の皿を持つて来て、そのまま愛と翔一の間で腰を下ろした。

「…」

優は静かに目を閉じている。

（あ…出たよ…優のストレス解消法…）

優は嫌な事が有ると愛の前に居るときは静かに目を閉じるのだ。翔一と居るときは愚痴を溢すのだが…

「あの…貴方の名前は…？」

おもむろに愛が口を開く。

「あつ！！すみません。俺の名は山形圭介。圭介でも山形でもお好きに呼んでください」

この青年。山形圭介は髪の毛は坊主頭をそのまま伸ばした様な感じで、凜とした眉毛とその顔立ちは昔の日本人、侍の様な感じだ。そして何より背が低い…

先程優と圭介が並んで立っていた時は優の体格のせいもあるだろうがとにかく小さく見え、翔一は自分も並んで立つとこんな風になるのかなあ。と少し自信がなくなった。それほど小さいのだ。

「私は1年3組の木村愛よ。じゃあ山形君って呼ばせてもらうね」

「あ、じゃあクラス隣だね。俺は二組なんだ。よろしく」

「二組」

の部分で優の眉毛がピクリと動いたのを翔一は見逃さなかった。

「お前が二組だと？オレは信じないぞ」

「よもや…貴様も二組か？」

「ハハハハ。奇遇だな。圭介。優。俺達同じクラスらしいぞ」

このシチュエーションに堪えられずに翔一は笑い口を開く。

「あ。俺は黒鳥翔一だ。って朝遅刻したからわかるかな…とりあえずよろしく」

「ああ。よろしく」

と、難無く翔一と圭介は握手をするもやはり優は苦虫を噛み潰した様な顔をしている。

しかし30秒後愛の鋭い眼光により優は作り笑顔を作らなければなかった。

その後優と圭介の間に何か壁のようなものを感じながらも何事も無くこの場は解散された。

まだ日の短い春の夕焼けの中、帰り道がもちろん同じの翔一と愛は自転車に乗り話していた。

「ふゝ…一時はどうなるかと思ったよ…」

「そうだね。あの二人いきなり喧嘩しちゃうんだもん」
クスクスと笑いながら言う愛に翔一は

「愛が一番危なかった」

と言いそうになったが踏みとどまり苦笑いを溢した。

「まあ…明日からもつと楽しくなるな」

「…」

翔一が笑顔で言うのと愛は急に押し黙った。

「愛？どうした？」

「また翔ちゃんと違うクラスだったなあ…ってさ」

「まあそういう事もあるって。来年はきっと一緒だろ」
暗く言う愛に対して翔一は笑いながら言った。

「そうだよね。じゃあ…どっちが先に家に着くか勝負…！」

「はっ？あつ。おい愛…！ずるいだろ。待てって…！」

こうして高校生活が始まった。

桜の花びらも散り始めた四月の中旬…台所でせつせと弁当を作る三人の女の子がいる。そもその始まりは先日のお菓子屋での優のこの一言から…

「今度みんなで花見しようぜ。オレは場所取りするから…よし。翔一は材料の買い出し」

「唐突だな…」

もちろん前置きなしに言われれば誰でも驚くのだが…

「じゃあ私と…あと誰呼ぶ？」

「ん…美咲ちゃんと唯ちゃん呼ぼうよ。たくさんいる方が楽しいし。じゃあ私達はお弁当作って来るね」

何故か乗り気の愛を尻目にやる気のない翔一。しかし後日しぶしぶ買い出しに言ったのである。

もちろんこの後会話に加わった圭介も参加することとなった。（優は反対したが…）

「これで良し。と…唯ちゃん…？」

愛の方は弁当は完成した。だが…

「あ。愛ちゃんは出来ましたか？私は…少し失敗してしまいました…」

あくまでも唯にとっては

「少し」

だろうがそれは誰が見ても大失敗の出来である。例えばだし巻き卵は見事なまでにくろこげで、おにぎりはもはやおにぎりとは呼べない形となっている。

「…愛ちゃん…やっぱり不味いかしら…」

「うーん…味が良ければ大丈夫だと思うよ…」

「ですよ。じゃあ包みましょう」

味見をせずにふるしきに包む唯を見て愛は少し苦笑いを浮かべながら今度は美咲の方を見た。

「……」

「愛ちゃん！…どう？アタシ結構料理練習したんだ！」

確かに前に美咲の家に泊まった時よりも見た目がずいぶんとなつていい。

唯とは違い途中で味見をしていたのを愛は見たので美咲は大丈夫だなと愛は確信した。

場所は変わって飯田邸の庭先である。

「……」

「おい…」

「なんだい？」

「なんだい？じゃないだろ！なんでお前がここにいるんだ！？」

飯田邸の庭先の桜の木が並ぶ所に男の子二人がいる。
しかし何やら様子がおかしい…

「俺も呼ばれて来たんだよ？何かおかしい事をしたかな？」

「お前がここにしている事が！！それが一番おかしいし、不思議なんだよ」

「ふう〜…まったく…」

一週間程前のお菓子屋での一件もあり、二人の仲は最悪である。そこに一人の男の子がやってきた。

「お。圭介、優、今日は天気が良くて最高だな」

「お、黒鳥そうだね。絶好の花見日和だ」

「桜も丁度散り際だしな……って優？どうした？桜の木に持たれかかって…」

「いや…ちょっとめまいがしただけだ…」

「気を付けるよ？」

「まあそれなりに…」

しかし翔一にはわかっていた。明らかに優が圭介を嫌がっている事を…

（でもここまで優が圭介の事嫌がる理由がわからねえなあ…こいつ、いつもなら誰とでも（フレンドリーじゃなければいかん）とか言うのによ…）

「優…」

ふと翔一が優に話かけた。

「はい？」

「今日は…犬来ないと良いな…」

「まあこの時点で来てないからな…でも弁当の匂いで来たなんて行ったら話にならねえよな…」

「まったくだ…」

「犬って？」

もちろんこの話を知らない圭介は二人に犬の事を聞いた。そして二人は先日この家に泊まった時の事を話した。

「そしたらこいつへばって俺が荷物持ったらおもいつき逃げやがるのー!!」

「しゃーねーだろ!? オレは犬が苦手なんだ。…んで、オレが後ろ見たら犬なんていねえ訳よ…本当はこの家で飼ってるんだけど放して無い時は犬の鳴き声を放送するらしいぞ…」

この話を聞いて圭介の顔が青くなった。

「そ、そうか…」

実は圭介も犬が苦手なのだ。そんな圭介の変化を優は見逃さなかった。

「ほう…お前も…犬が苦手なタチか？」

「ま、まさか…お前みたいな気弱なやつと一緒にするなよ」

「へえ…後で試してみるか？」

「……」

「まあまあ二人共…そろで辞めとけて…つとと、愛達が来たぞ」

「おーい、愛ちゃん。こっちだよー!!」

圭介に言い勝ち気分が良くなった優が愛達を呼んだ。もっとも言い勝ったと言っても優も犬嫌いなのは変わらない…

「はい、これがお花見弁当ね…あと…お母さんが来ちゃったんだけど…」

と言って愛が目を伏せる。

もちろん翔一と優は顔が青ざめる。

「本当に？」

優が口を開く。

「うん…お母さんが行きたいって聞かなくて…着いて来ちゃった…」
「まあ…なんとかなるか…」

ここまで暗くなっている三人を見て、圭介が不思議に思い尋ねた。
「ん…木村さん？どうして木村さんのお母さんが来ると不味いの？」

「それは…」

愛がそこまで言った所で門から愛の母がやって来た。

その顔を見て圭介の顔も青ざめたのは言うまでも無い。

「みんな、こんにちは」

「「「………」」」

「アハハハ…」

美咲も苦笑を漏らした。

「じ、じゃあお弁当食べよう？美咲ちゃんも唯ちゃんも頑張ってたんだよ」

「そうそう！！はい。翔一くん」

愛の言葉を聞き我に返り我先にと言わんばかりに美咲が翔一の隣に座る。もちろん唯も慌ててそちらへ向かった。

「あらあら…翔君つてもてるのね」

愛の母が口を開く。

ちなみに愛のお母さん、名前は沙織で、まだ33歳、愛の事を17歳の時に産んだ。その後女手ひとつで育てたのだ。が、この話はまた…

「沙織さん！！変な事言わないでくださいよ…」

「まあまあ…翔一くん。照れない照れない」

「照れてねえよ！！」

美咲が翔一をからかい、翔一は熱くなっている。それを楽しむ美咲と唯と沙織…

「…あ、優も圭介もどうぞ」

と愛が弁当の包みをほどき、二人に出す。

「お。さすがは愛ちゃん。いつも通りすばらしい」

「そうだな。高校生にしてはかなりのものだ」

と、先程までの口喧嘩はどこへ行ったのか、圭介と優が口を揃えた。それほどまでに綺麗な出来の弁当なのだ。

「ねえーえ…優くん」

沙織が妙な色気を出しながら優に声をかける。

「…なんすか？木村先生…」

危険な悪感を感じた優は首だけを沙織の方へ向ける。

「お酒…ある？」

「へっ？ま、まさか…高校生は飲んじゃいけませんよ。先生！」
「本当に無いのお？内緒にしておくからさ。ね？」

教師がこんなもので良いのだろうか…いや、良いはずがない。

「はい…」

そう言つて優は腰を上げリュックサックへと歩き重そうに持つと沙織の横に置いた。

「さっすがー！！私はわかつてたわよ」

「は、はあ…」

すぐさま日本酒の蓋を開けコップに注ぐ沙織…

一同呆然と見ていると…

「な、何？あなた達も飲むの？」

と、聞くものだから更に開いた口が塞がらない状態になってしまった。

「じゃあ頂きます」

そう言つて優は沙織の前に座り酒を注ぎ一気に飲み干した。

「おい…優…」

「へっ？」

何か悪い事をした？とでも言いそうな顔で優は翔一の方へと顔だけを向けた。

「流石にイツキ飲みは不味いぞ…」

「そうじゃないでしょ…！」

と、頭の悪い翔一の言葉に愛が突っ込む。

「…なんで？」

両隣の美咲と唯が抱きついたままであるが、さも居ないかの様な感じであしらう翔一が言う。もちろん、愛が言いたいのは高校生はお酒を飲んじゃだめ。という事だ。当たり前である。

しかしそんな女子高校生をしりめに、沙織と男子高校生はグイグイと飲むのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2172b/>

純愛～忘れてはいけないもの～

2011年1月3日07時27分発行